

新島襄先生の生涯と念願

松山義則
(同志社総長)



本年、一九九三年二月十二日に、わたくしたちは同志社の創設者、新島襄先生の生誕一五〇年の記念のときをむかえました。たまたま三年前の一九九〇年一月二十三日が、先生の永眠一〇〇年記念にあたりましたので、この三年間、新島襄先生を記念して、全国各地二十二カ所において講演会を開催し、また先生の生涯を中心とした展示会、そのほか記念出版などの事業を手がけてまいりました。幕末から明治にかけて、わが国の激動する近代化の社会的状況のなかで生きぬいた、一人の青年、新島襄先生の生涯をうきばりにすることによって、キリスト教主義にもとづく大学の設立にかけた先生の念願を再確認し、広く多くの人びとにその人物像と教育理想を訴えようとするためでありました。

先生の四十七年に近い生涯は、その政治的、歴史的事態の推移のなかで、時代状況の反映を受け、

またその時代を創り拓くものであったと言えます。先生の誕生は、一八四三(天保十四)年旧暦一月十四日でありましたが、丁度、この年、天保十四年九月には、老中、水野忠邦が罷免されました。その二年以前、天保十二年に、幕府は彼をたて、享保、寛政の制にならない、幕府権力の強化を計るため、天保の改革に着手しましたが、その施策は挫折を来し、民衆の不安をあおり、徳川幕府三百年の末路を歩み出すこととなりました。先生の誕生は、幕末世情不安に向うときであり、青年時代を多感のなかに送られたのであります。先生の誕生後十年、一八五三(嘉永六年)には、ペリー艦隊の浦賀入港があり、下田、函館の開港がつぎきました。先生が十七歳のとき、一八六〇(万延元年)には、その少年は自らの眼で、浦賀沖にうかぶオランダ軍艦の威容をとらえました。同年三月には、江戸桜田門外で井伊直弼が斬られています。先生はわが国の歴史的激変期に誕生し、徳川幕府封建制にくみこまれた武士社会のなかで成長し、内外の激動する社会的状況を身にうけて、憂国の志を純粋な青年の心に燃やされたことと思います。この願いは、国禁をやぶって脱出する決意をかためさせ、その実行となりました。二十一歳、一八六四(元治元年)年のことであります。

先生のご生涯を三つにわけて考えると、誕生から海外脱出までを第一期とし、これにつづく十年、一八七四(明治七年)までの海外勉強の時期を第二期とすることができでしょう。函館を脱出され、先生が洋上にあつた元治元年七月には、京都では禁門の変が勃発し、幕府と諸藩の關係は緊張を増していました。そして翌年、慶応元年から四年にかけて、幕府最終の局面が展開しており、慶応四年には会津若松での鶴が城の開城、また、京都、薩摩屋敷に山本寛馬の幽閉がありました。一方、先生が一年の月日をかけてボストン港に入港されたとき、アメリカはわが国幕末の内乱と同様に、南北戦争が終結し、リンカーン暗殺を知らされた時期でありました。物価の上昇と、知る人たよる

すべもない先生は、ボストン港で不安と焦燥の長い日をすごされたと思います。幸いにしてハーディー夫妻の援助を受けることとなり、これから三十一歳まで十年の間、フィリップス・アカデミーからアーモスト大学、そこでアンドーヴァー神学校での勉学のときを送られました。また、その間に、岩倉具視使節団と会い、欧米教育制度の調査に一年半の日々をすごされました。日本はすでに明治政府の樹立によって近代化への路線を走り、文明開化の時代をむかえていました。先生が欧米での勉学の十年の最終、帰国を直前に、アメリカン・ボード海外伝道部の年会で、キリスト教主義による大学を設立したいという訴えを会衆の前に披瀝し、五千ドルの寄付の約束を得られたことは、先生のこれからの生涯、同志社の創設とその教育理想の実現にかかわる象徴的出来事でありました。帰国して翌年、一八七五(明治八年、同志社英学校を京都の地に設立してから、一八九〇(明治二十三年、死に至る十五年を先生の第三期の時期と見ることができるよう。この十五年は、同志社草創にかかわる苦渋にみちた歲月でありました。明治の国家主義の抬頭は、官尊民卑の風潮のもとで、私学、ことにキリスト教主義学校への不当な干渉となり、それに対決して、キリスト教主義を教育の理想として堅持し、教育と伝道にすべてをかけることにありました。同志社大学設立に向けて、募金の旅を重ね、日本人教師と宣教師間の不和になやみ、財政、人事、経営の責任者としての苦悩がありました。

先生のご生涯を見ると、幕末から明治にかけて、わが国の政治的、歴史的変革にあたり、その近代化のなかに生きた人であります。この時代に生き、時代を拓いた人物の精神の根幹は、若き日にふれたキリスト教信仰にあったと思います。フィリップス・アカデミーの在学時、一八六六(慶応二年、二十三歳のときに、アンドーヴァー神学校付属教会で受洗されましたが、その直前、ハーディ

「夫人への手紙には「キリストはわれらの罪のために死にたまいし神の御子にして、われらはキリストによりてのみ救われるべきものであると信じます。」と明確に述べています。これは、かつて香港で入手した漢訳聖書の「神はその独り子をお与えになるほど、この世を愛された。子を信じる人が一人も滅びないで、永遠の生命を受けるためである。」という言葉に感動されたことから見ても、先生が歴史的な時代背景の人間であるとともに、その深い精神性のなかに、真摯な福音信仰に生きた人物でありました。人間の存在、その罪、そして救済を求道される霊の人であり、そこに時代に生き、同志社を設立する原点がありました。人間はそれぞれの環境に生きて、その生涯を送ります。その日々は、苦難の道であると言わねばなりません。しかし、新島先生は聖書に学び、それによって生かされていました。「あなたたちを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはず。神は誠実な方です。あなたたちを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練といっしょに、それに耐えられるよう、逃れ道をも備えていくのださるのです。」という言葉は強い励ましであり喜びであります。また「どんなことでも思い煩うのはやめなさい。何事につけ感謝のこもった祈りと願いとをささげて、求めるものを神に打ち明けなさい。そうすればあらゆる人知を超える神の平安が、キリスト・イエスと一致しているあなたたちの心と考えるでしょう。」とあります。新島先生の念願と祈りを自らの心として、わたくしたちは自分の生涯を歩みつづけたいものと思います。

快い大空へ舞いあがれ

岩 山 太 次 郎

(同志社大学長)



ご卒業おめでとうございます。

いま学窓を巣立とうとされている皆さんは、これから何をするかを心に固く決めておられることと思います。創立者新島襄がアームスト大学を卒業したのは、一八七〇年七月十四日でした。彼もそのときすでに心に固く決めたものを持っていました。彼が卒業式に出席したかどうかは明らかではないそうですが、卒業式直後の七月二十五日に、アームスト大学時代の恩師であり、心の支えでもあったシーリー教授(のち一八七六年にアームスト大学の総長に就任した)夫妻に宛てた手紙で、祖国日本をあとにしたとき、母や姉の流す涙の悲しい光景のなかでも、自分は笑みをうかべ、「小鳥がかごの束縛からのがれて、快い大空へ舞いあがるような気持」であった、そしてアームストを去るときは、「あなた方が私に差し伸べられたキリスト者としての愛が私を奮い立たせ、私にも同じことを他の人にさせようとするのです」と

書き送っています。これは新島の固い決意の表明です。このときすでに彼はアンドーヴァー神学校への進学を決めていました。帰国後はキリスト教主義の学校の設立の決意を心に秘めていたのでありました。

しかし、いかに固い決意であっても、それを成就させることは容易ではありません。決意したことが成就に至らないで、挫折することが多いこともよく知っています。わたしたちにとつて重要なことは、決意の遂行が困難で、挫折するかもしれないようなときに、成就に向わせる信念の拠所となるものを持っているかどうかということだと思います。

去る二月十二日は新島襄の生誕一五〇年の記念すべき日でありました。二月十二日が誕生日といえば、すぐ思いあたる人があるかもしれません。アメリカ合衆国第十六代大統領リンカーンの誕生日でもあります。リンカーンは新島より三十四年早い一八〇九年の生れですし、新島がアメリカに着く少し前に暗殺されていますので、二人の直接の結びつきはありませんが、新島はいろいろな機会にリンカーンに言及しています。その最も早い時期のものが「箱楯よりの略記」（一八六六年二月）であります。一八六五年七月二十一日のボストン港到着の直前、七月十九日に、「花旗国マスサチューセツト邦之東〔岬〕コッドに來り、或る漁船に逢ひ、初而南北戦争静まり、且南方の探子シヨン・ウイルクス・ボース、大統領リンコロンを砲殺せし由」と記しています。

リンカーンが一八六三年一月一日に、奴隷の解放を宣言したことは、よくご存知のところ です。奴隷制度の廃止は今日のわたしたちには想像もできないほど困難なことでした。北部は「国家の破壊を黙視するよりは戦争を甘受する態度」でありましたが、「利権を強化し、貫徹し、拡大」させようとする南部が、「国家を存続さすよりは戦争に訴える」という態度でありましたので、リンカーン

は南北戦争というアメリカにとつての重大な危機を憂い、戦争で多くの血が流されることに苦悩しました。一八六五年三月四日、彼の行った大統領再選就任演説は、短い演説ですが、彼の苦悩の深さがよく読みとれるものであります。彼はこう言います。「奴隷制度がなければ、この反乱は存在しなかったはずだ。だから奴隷制度を廃止すれば、反乱は終るはずだ」と。しかしリンカーンは、国を二分するこの当事者双方は同じ聖書を読み、同じ神に祈り、同じ神に助けを乞うことに苦悩しました。

リンカーンにはこの苦悩を克服する信念がありました。いずれもが神の裁きを恐れなければならぬ者であること、南北戦争は神のくだし給うた罰であること、いずれもが他人を裁くことは止め、すべての人にたいして愛を持ち、神が悟らしめる正しきことを堅持すること、そして、現在の仕事をつづけるという信念です。

新島がリンカーンに言及している資料の一つに「愛国の主意」と題された草稿があります。そこには「人他人の爲ニ身ヲ捨ル、愛ニ於之ヨリ大ナルハナシ」と。短い言葉であります。リンカーンに苦悩を克服させた信念の拠所となった愛のことを述べています。この愛こそ新島がアームストを離れるとき、決意の拠所となる愛であると思います。これは新島が涵養しようとした愛であり、真正の教育の根幹とした愛であります。

いま皆さんは新島が苦悩のなかで設立した学窓をあとにされようとしています。「快い大空へ舞いあがるような気持」で、それぞれの決意の成就に向って下さい。

皆さんのご健康とご健闘を心から祈ります。

目を世界に開いて

—新島襄生誕一五〇年の年に—



石 田 章
(同志社女子大学長)

同志社女子大学および同志社女子大学短期大学部を卒業される皆さん、ご卒業おめでとう。また、今回大学院修士課程を終了された九名の方々には、心から祝福の言葉をお贈りすると共に、皆さんがこれを一つの節目とされ、学究としてのそれぞれの道をまた新たに踏み出されることを切に願っています。

ところで、皆さんは同志社にとってたいへん意義深い年に卒業されることとなります。今年一九九三年は、創立者新島襄の生誕一五〇年という記念すべき年に当ります。新島は一八四三(天保十四)年陽暦二月一二日、江戸神田にあった安中藩邸内に生まれしました。新島の、決して長くはなかったが、しかし波乱に満ちた四十七年の偉大な生涯がこの時幕を開けたのでした。

記念すべき年、と言えば、皆さんが在学されたこの四年から二年の間にはさらに幾つかの意味深

い年が重まりました。三年前の一九九〇年は、新島襄永眠一〇〇年の年であり、また昨年一九九二年は、新島を助け同志社を世に生み出す最大の功労者の一人であった山本覚馬の永眠一〇〇年、そして覚馬の妹で新島襄夫人八重の永眠六〇年の年でもあったからです。

山本覚馬は、草創期の同志社はいうまでもなく、京都の、否、日本の近代化にもきわめて大きな足跡を残した巨人ですが、一般には余りに知られることの少ないままに今に到っているように思われます。この機会に、彼について若干触れておきたいと思います。

山本覚馬は、一八二八(文政十二年)、会津若松に生まれました。若くから蘭学・英学を修め、当時幕末の時代にあつて、西洋事情に精通したわが国最高の人物の一人でした。一八六八年、鳥羽伏見の戦いに会津藩は薩摩軍と戦つて敗れ、捕われた覚馬は相国寺門前にあつた薩摩藩邸に幽閉の身となります。その頃彼はすでに視力を完全に失つていたのですが、にもかかわらず、口述筆記による『管見』なる意見書をまとめ薩摩藩主に差し出します。この『管見』は、当時の日本が置かれていた危機的な国情を適確に把握し、立論の根底に明確な国際的視点を据えて、今国内で相争うことの愚を強く戒め、今後日本がとるべき国策と指針を二十二の項目にわたつて、簡にして要を尽した文章できわめて明快に提言したものです。今読んでも、その鋭い洞察と先見性とは、舌を巻く思いがします。覚馬がこの『管見』を著わした一八六八年の頃、新島襄はまだアーモスト大学での勉強をようやく始めたばかりの時でした。

この覚馬が、やがて一八八五年の春、その前年に米国から帰国し、英学校設立に奔走する新島を知ることとなり、以後、物心両面にわたつて新島を支える最大の理解者となることは周知の通りです。新島襄が、同志社設立の中心にあり、その要であつたことは今更言うまでもありませんが、し

かし同時に、新島の意を解し、側面から支え協力を惜しまなかった覚馬をはじめ幾人かの人々の存在を決して忘れてはならないでしょう。とりわけ、女子大学のルーツである同志社女学校の開設に当って、山本覚馬をはじめ、妹八重、宣教師J・D・デイヴィス、アリス・J・スタークウェザーといった人達が実際に果たした役割は、あるいは新島自身のそれを上まわるものであったかも知れないのです。山本覚馬は、『管見』の中に「女学」なる一項を設け、次のように書いています。

国家ヲ治ムルハ人材ニヨルモノナレバ是ヲ育スルハ緊要ナリ。日本支那ハ婦人ニ学問ヲ教ヘズ、自今以後男子ト同ジク学バスベシ。夫妻トモ精神十分ノ智ヲ尽スモノナレバ其子親ニ優リ又其子モ親ニ優リ、追々俊傑ノ生ルハ其理也。童子ハ婦人ト関スルコト多ケレバ婦人賢ニシテ教ユルト愚此ヲ育ツルトハ其相違甚シ。夫女ハ性質沈密ノ者ナレバ其性ニカナフ學術国体ニ関ハル者ヲ撰ビ教ユルベシ、且才女ハ猶ホ学バスベシ。

これが記されたのは、同志社女学校が新島襄を校長として正式に開校する実に十年も前のことです。覚馬のこの卓越した識見や、その他の人達の絶大な協力がもし無かったとしたら、同志社女子部の発足はありえなかったか、少くともかなり遅れたものとなったかも知れないという見方は、あながち不可能とは言えないでしょう。

以上、いささか長々と覚馬をはじめとする新島を支えた人々のことを述べたのは、一つには皆さんがこれからのような道を歩まれるにせよ、事を成すに当って、陰に陽に、あなたを支える多くの人の力と助けがあつてはじめて可能なのだ、ということを、同志社草創期の群像を通して是非知

っていただいたったからです。

そして今一つのは、ここにふれた人達はすべて、幕末から明治の初頭という時代にあつて、早々と世界に目を開き、世界的視野の中で日本を憂え、日本を導こうとした人達だった、ということ。あなたが生きる来るべき新たな世紀は、地球の環境問題一つをとってみても、単に国家や企業の利害を越えた、グローバルな思考に立つて行動しない限り根本的な解決はありえない時代に直面しています。そして、こういう時にこそ、あなた方のすぐれた先人たちの見せた生き方から、何かを学びとって欲しいのです。新島襄の唱えた真の意味での「良心を手腕に運用する」人材を、今ほど世界が求めている時はないのです。

新島襄生誕一五〇年という記念すべき年に同志社を巣立って行かれるあなた方に、私はあらためて、あなた方一人ひとりが、その「良心の人」となるように絶えず努めてくださることを心から願っています。